

[茶の美術展によせて]

仁清作「色絵おしどり香合」について

野々村仁清は色絵陶器を大成し、京焼に大きな影響を与えた陶工です。本名は清右衛門といい、『隔冥記』や『仁和寺御記』によると、当初は焼物師、丹波焼、壺屋と呼ばれています。「仁清」の号は仁和寺宮の知遇を得て、門前に窯を開いたことから、「仁」の一字を拝領し、頭文字の「清」と合わせたと伝えられます。

藤田美術館と萬野美術館には、同種の「色絵輪宝羯磨文香炉」が所蔵され、ともに底面に「奉寄進播磨入道仁清作 明暦三年卯月」と刻まれています。この銘文の「播磨入道仁清」という落款によって、明暦三年(1657)四月には剃髪し、「仁清」と号していたことがわかります。当時は陶工が芸術家として認められておらず、「播磨入道」と名乗るのは異例のことです。特別な陶工として、よほど高く評価されていたでしょう。仁清がこのような社会的地位を得たのは、金森宗和(1584~1656)の引立てによると考えられています。金森宗和は飛騨高山城主、金森可重の長子に生まれましたが、大阪の陣に際して勘当され、京に移りました。大徳寺伝叟紹印に参禅して宗和と号し、茶人として生涯をおくっています。その雅な茶風は「姫宗和」

と称され、公家社会に広く受け入れられました。

金森宗和の書状には、しばしば御室焼に関する記事が見られます。大和文華館の所蔵する堀越中守宛の書状にも、次のような記載があります。「(前略)御室焼物御用候よし、茶入茶碗いくつほど御用候、可被仰下候、焼物いたし申者、昨日来申、方々あつらへ、大かたかまつまり申よし申候間、はやく可申付候(後略)。日付の閏六月七日は承応二年(1653)にあたり、この年、宗和は七十才でした。宗和は堀越中守利長に御室焼を熱心に勧めており、「焼物いたし申者」、すなわち仁清とかなり懇意であったことがわかります。

この時期には、社交上の嗜みとして武家の間にも茶湯が広まり、多くの茶道具が必要とされました。また、武家の公家文化への憧れも強く、小堀遠州の亡き後、公家文化にもっとも近い茶人である宗和に茶道具の調達が依頼されました。時には、宗和は仁清に切形(デザイン)を与えて、このような需要に応えています。中国陶磁や韓国陶磁の写物だけではなく、茶道具に新しい美意識を反映させようとする意識がうかがえます。その中心にあったのは公家文化の洗練さ



色絵おしどり香合 大和文華館

れた華やかさであったと思われる。宗和は仁清という有能な陶工を得て、好みの道具を普及させることができました。仁清の作品には「姫宗和」の茶風が端的に示されています。

仁清は様々な形状の器物を残していますが、いずれも軽やかに均整がとれています。これは陶土を薄く均一に引き延ばす、高い轆轤技術によりです。また、装飾品や動物を象った細工物も得意としていました。大和文華館の「色絵おしどり香合」もその一つです。

水禽のなかでも、とりわけ美しいおしどりは、錦手の格好のモチーフです。この作品では、仁清特有の細かな貫入の生じた白濁色の地に下絵の錆絵付をほどこして赤、青、緑、黒の釉薬で上絵を描き、金彩によって細部を丁寧に整えて仕上げられています。頭毛の青と、背の銀杏の葉のような形をした思羽の赤が一際、鮮やかに映えています。香合ですから、身と蓋に分かれますが、身には上絵を描かず、身と蓋の内側には緑釉を掛けています。

大和文華館の作品の他に、仁清作のもう一つの「色絵おしどり香合」が藤田美術館に所蔵されています。この作品は山科毘沙門堂の宮門跡の遺愛品であったと伝えられます。絵付をはじめ技法はほとんど変わりありませんが、趣は微妙に異なります。大和文華館の作品と比較すると、より精緻に形作られ、上絵付も身の部分にいたるまで入念に施されています。胸



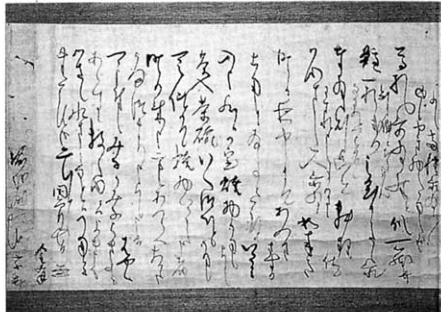
色絵おしどり香合 藤田美術館

を張って顔を上げる姿には緊張感が漂い、気品さえ感じられます。一方、大和文華館の作品では、全体の形状を円く柔らかにまとめ、頭と思羽を大きく強調し、簡略に表現されていることがわかります。しかし、緊張感が失われ、形式化しているとは一概に言えません。この作品には藤田美術館の作品とは異なる魅力があります。精巧さや華麗さではなく、思わず掌にのせて見たくするような愛らしさです。まだ面影に幼さを残す若鳥が、静かに水面に浮かんでいるようです。

大和文華館と藤田美術館の二つの「色絵おしどり香合」は、仁清作品に関して多くのことを考えさせてくれます。おそらく藤田美術館の写実的な作風を経なければ、大和文華館の作品は生まれなかったでしょう。大和文華館の作品は近衛家への献上品と伝えられ、内箱の蓋裏には、「陽明」の朱文方印を捺した紙が貼られています。また、近衛家熙(1667~1736)の言行を記録する『槐記』には、享保十七年(1732)十一月二十日の口切茶会に、仁清作のおしどり香合が用いられたことを記しています。仁清が「色絵輪宝羯磨文香炉」を寄進した明暦三年(1657)当時、近衛家の当主は家熙の父、基熙(1648~1722)です。先代の高嗣が壮年で早世したため、基熙はまだ九才でした。近衛家の幼い当主へ贈られたとすれば、まさにふさわしい作品と言えるでしょう。

(中部義隆)

重要文化財 色絵輪宝羯磨文香炉 萬野美術館



金森宗和堀越中守宛書状 大和文華館

季刊 美のたより No.126

平成11年2月18日

発行 大和文華館